

葬送船の記憶

深澤 芳樹

万葉歌二首 『万葉集』巻第2に、次の歌二首を収載する。そしてそれぞれに「一書曰」として作歌の事情を添えている。詞書と歌を、東野治之さんらの口語訳と読み下し（東野治之ほか1994）で以下に示す。

ある書に、近江天皇（天智）がご病気で、危篤に陥られた時に、大后が奉られた
というお歌一首

青旗の 木幡の上を 通ふとは 目には見れども 直に逢はぬかも（巻第2、148）

ある書に、天皇が崩御した時に、太上天皇（持統）が作られたというお歌二首

北山に たなびく雲の 青雲の 星離れ行き 月を離れて（巻第2、161）

前者の作者は天智天皇の皇后になった倭姫王（やまとひめのおほきみ）、すなわち倭大后（やまのおほきさき）、後者の作者は天武天皇の皇后になった鷗野讚良皇女（うののさららのひめみこ）、すなわち後の持統天皇である。天智天皇は天智10（671）年の12月3日に、天武天皇は朱鳥元（686）年9月9日に、それぞれ亡くなっている。

この二首はともに、残された皇后が亡くなった天皇を痛んで歌った絶唱であり、挽歌の傑作である（山本健吉2009）。

ところで日本列島における葬送時の不思議な風習が、中国の正史に記録されている。

屍を船で運ぶ 『北史』と『隋書』の倭国伝に、同一文を収録する。藤堂明保さんらの読み下し（藤堂明保ほか2010）を、以下に引用する。

葬に及べば、屍を船上に置き、陸地にて之を牽く。或いは小輿を以ってす。

すなわち倭国においては、小さな輿（こし）に乗せる他に、船上に遺体を安置し、陸上を綱を引いて運ぶ風習のあったことを伝えているのである（小林行雄1976）。

船上に遺体を乗せる光景自体は、『古事記』、『常陸国風土記』に、また『日本書紀』にあって、周圀を海に囲まれた日本列島においては決して突飛ではない。

『古事記』中巻仲哀天皇の条に、遺体を載せる船として「喪船」が登場する。それは仲哀天皇の死後、神功皇后が九州で生んだ御子の命を忍熊王（おしくまのみこ）が狙う場面においてである。山口佳紀さんらの読み下し（山口佳紀ほか2001）を引用する。

倭に還り上る時に、人の心を疑ひしに因りて、一つ喪船（もふね）を具へて、御子を其の喪船に載せて、先づ、「御子既に崩（さ）りましぬ」と言ひ漏さしめき。

つまり「喪船」を、神功皇后が御子が死んだと偽り敵を欺く畏に利用した。「喪船」は、九州から瀬戸内海を東行し大和に向かう。

忍熊王、其の態（わざ）に畏まらずして、軍（いくさ）を興（おこ）して待ち向へし時に、喪船を赴（おもぶ）けて、空しき船を攻めむとしき。爾くして、其の喪船より軍を下ろして、相戦ひき。

と事態が進行する。

ここで、「喪船」に対置するのは「空船」である。当時の常識は、「喪船」に兵は乗せない、さらに山口さんらが注で指摘するとおり、「喪船」は外観で明確に区別できた。これを前提にしなければ、神功皇后の策略は成立しないからである。そして忍熊王反乱軍は、御子や神功皇后のいない「空船」を攻撃し、まんまと罠にかかる。

『常陸国風土記』行方郡の条には、建借間命（たけかしまのみこと）が策略を練って住民を浜におびき出し、背後からこれを襲う場面がある。次の光景が住民に建借間命の葬儀を確信させたのである。この偽りの葬儀は、海上で船を用いて執行された。植垣節也さんの読み下し（植垣節也1997）を引用する。

海渚（なぎさ）を巖飴（かざ）り、舟を連ね棧（いかだ）を編みて、雲の蓋（きぬがさ）を飛（ひるが）へし、虹の旌（はた）を張る。天の鳥琴、天の鳥笛、波の随（まにま）に潮（うしお）を逐（お）ひて、杵を鳴らし曲（うた）を唱（うた）ひ、七日七夜、遊び楽しみ歌ひ舞ふ。

のであった。そして住民は、

盛りなる音楽（うたまひ）を聞き、房（いへ）を挙げて男も女も、悉尽（ことごと）に出で来て、浜を傾けて歎び咲（わら）ふ。

と、視覚と聴覚で、葬儀であると確認したのである。

『常陸国風土記』信太郡逸文には、病死した黒坂命（くろさかのみこと）の遺体を乗せた輜車が、黒坂の命の輪輜車（きくるま）、黒前之山ゆ発（た）ちて日高（ひだかみ）の国に到るに、葬（みはふり）の具儀（よそほひ）、赤旗青幡（あかはたあをはた）、交雑（まじ）り飄颺（ひるがへ）りけり。雲飛び虹張りて、野を瑩（かがや）かし路を耀（てら）しけり。時の人謂（なづ）けて赤幡垂（あかはたしだり）の国といふ。

と、陸上を進む光景を記す。

主人は蓋（きぬがさ）の下にいるから、海上でも陸上でもどちらにおいても、雲の蓋がひるがえり、虹の旗がはためくのは死者を安置した運搬具においてである。

また仲哀天皇は、『日本書紀』によれば山口県に所在した豊浦宮で殯（もがり）された。仲哀天皇の遺体を船で移動した記事が掲載されている。小島憲之さんらの読み下し（小島憲之ほか1998）で記す。

卷第8仲哀天皇9年2月に、

窆（ひそか）に天皇の屍（みかばね）を収め、武内宿禰に付（さづ）けて、海路より穴門（あなと）に遷りて、豊浦宮に殯（もがり）し、无火殯斂（ほなしあがり）をしたまふ。

とあり、卷第9神功皇后摂政元年2月には、

即ち天皇の喪（みもがり）を収めて、海路よりして京（みやこ）に向ひたまふ。

と記す。

斉明天皇は、『日本書紀』卷第26によれば斉明7（661）年7月に九州朝倉宮で亡くなり、10月にその遺体は、難波まで海上を東した。小島さんらの読み下しを引用する。

冬十月の癸亥（きがい）の朔（つきたち）にして己巳（きし）に、天皇の喪、帰りて海に就（つ）く。

と記録するのである。

本稿では死者の遺体や魂魄を運ぶ船を、葬送船と呼ぶことにする。この葬送船の有力候補が発掘調査でみつまっている。

葬送船の実例 場所は奈良県北葛城郡広陵町に所在する墳丘規模220mの前方後円墳巢山古墳（中期前半）においてである。広陵町教育委員会による第5次調査で、その船はこの前方部周濠東北隅部でみつかった。縦板1枚と舷側板2枚で、固く緊縛していたはずの船底部材はなかった。発見地点が孤立した止水地点なので、これら船部材は使用後に解体された可能性が充分にある。解説（広陵町教育委員会2008）を、次に引用する。「縦板（クスノキ）は約2.1m、幅約78cm、下部の厚さ約25cm、上部厚さ5cmで側面に突起が付き、表面には円文様を中心に直弧文が描かれる。・・・（中略）・・・舷側板（スギ）は長さ約3.7m、幅45cm、厚さ5cmで端部が反り上がる。上端には三箇所切り込みがあり、下端にも長方形の小孔が並び、一個の孔には桜の皮や木片が残り、背面の痕跡から5cm程の角材と繋いでいたことが推測される。表面には円文様と帯文様が彫刻され、円文様は方形区画の中に表現している。中央の円文様以外は帯文様が上に描かれ重複文様となり、赤色顔料が塗られた痕跡が認められる。このほかに、舷側板と考えられる三角形材（クスノキ）がある。長さ約1.8m、幅38cm、厚さは5cmで一端は細くなり杓となっている。表面には円文様と帯文様があり、舷側板と関係のあることが判る。・・・（中略）・・・丸木船の上に縦板が斜め外方に取り付けられ、縦板裏の溝に舷側板（スギ）の反り上がった端部が嵌め込まれ、三角形の舷側板は舷側板（スギ）の下段に縦板と丸木船を繋ぐように使われたと考えられる。舷側板（スギ）の文様構成から左右対称であったと考えると準構造船の全長は8mを越えるものと推定される。」

すなわちこの3点は、一隻の準構造船を構成した部材である。しかも材が薄く、かつ文様が過多である点から、長距離を航行する実用船ではなく、儀式用の葬送船であり、かつ発見地点が古墳周濠だから、実際にこの船で死者の遺体か魂魄を運んだ、と推定できる。ただしこの船が陸上を移動したかどうかは、今後の調査で船底部の部材がみつかって外底面の磨り減り方を検討するまではわからない。

船形埴輪を配置する古墳もある。

船形埴輪 船形埴輪は、古墳時代前期末に現われてから後期まで続き、九州地方から関東地方まで分布する。

さて船形埴輪には、縦板を備えたタイプと縦板をもたないタイプとがある。このうち縦板を備えた船には、実際には縦板が船首側のみの片側タイプと船首と船尾の両方に取り付く両側タイプとがあったことがわかっているのだが、どうしたわけか、この縦板タイプの埴輪はすべて両側タイプに限られている。兵庫県豊岡市袴狭遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期の流路SD304から船を線刻したスギ板が出土した。描かれていた船はすべて縦板をもつタイプであった。このうち両側縦板タイプの船は、片側縦板タイプの船より格段に大きく描いてあって、この一隻を中心に15隻の片側タイプの船が周囲を取り巻いている（中村弘2000）。船形埴輪に縦板付きは両側タイプしかないという事実は、船形埴輪には大型の豪華船が選ばれたことを明かすのであろう。

三重県松阪市宝塚1号墳（中期前半）から、完形の船形埴輪が原位置で土圧でつぶれた状態で出土した（松阪市教育委員会ほか2005）。この船形埴輪は、全長140cmで、とても丁寧な作りだった。この船底と甲板に円孔が5カ所あいていた。このうち4カ所には別作りの土製蓋（きぬがさ）や土製大刀などがはまるのだが、船中央部の円孔の分だけ部品がたりなかった。完形に復原できる船形埴輪はこの他に、宮崎県西都市西都原170号墳（東京国立博物館2005）、大阪市高廻1号墳・2号墳（大阪市文化財協会1991）、大阪府東大阪市皿池古墳（上野利明1997）でもみつかっていて、すべて船底部中央に円孔があいている。辰巳和弘さんは、船形埴輪船底部にしばしば円孔があけられている事実に着目して、船形埴輪には有機物で作った旗や蓋（きぬがさ）、大刀などの形代を樹立していたと推定した（辰巳和弘2011）。

古墳時代や奈良・平安時代には土製や木製のミニチュアの船があって、このうちにたとえば大阪府八尾市中田遺跡(坪田真一2009)や静岡県浜松市伊場遺跡(浜松市立郷土博物館1978)の出土品のように、中央に孔をあけた例がある。しかも伊場遺跡のそれには孔に細棒がささっていたのである。

ではこの船底中央の円孔に立っていたのは、何か。

たなびく旗 この問題には、奈良県天理市東殿塚古墳(前期前半)でみつかった円筒埴輪に描いてあった絵(第1図1~3)が答える(天理市教育委員会2000)。1個体の埴輪に船が3隻線刻してあって、1隻が縦板付きの両側タイプ(2)、他の2隻は縦板のないタイプ(1・3)である。表面が荒れてはいるが、3隻ともに共通するのは船中央に風を受けてたなびく旗である。また少なくとも2隻には蓋(きぬがさ)が確認できる(1・2)。この蓋はやや船首か船尾よりに偏しており、かつ宝塚1号墳では土製の蓋が出土している。したがって宝塚1号墳出土船形埴輪の中央の円孔にさして立ててあったのは、旗でなければならない。しかもその旗は、腐朽して今に残らない有機質の素材で作ってあったことになる。

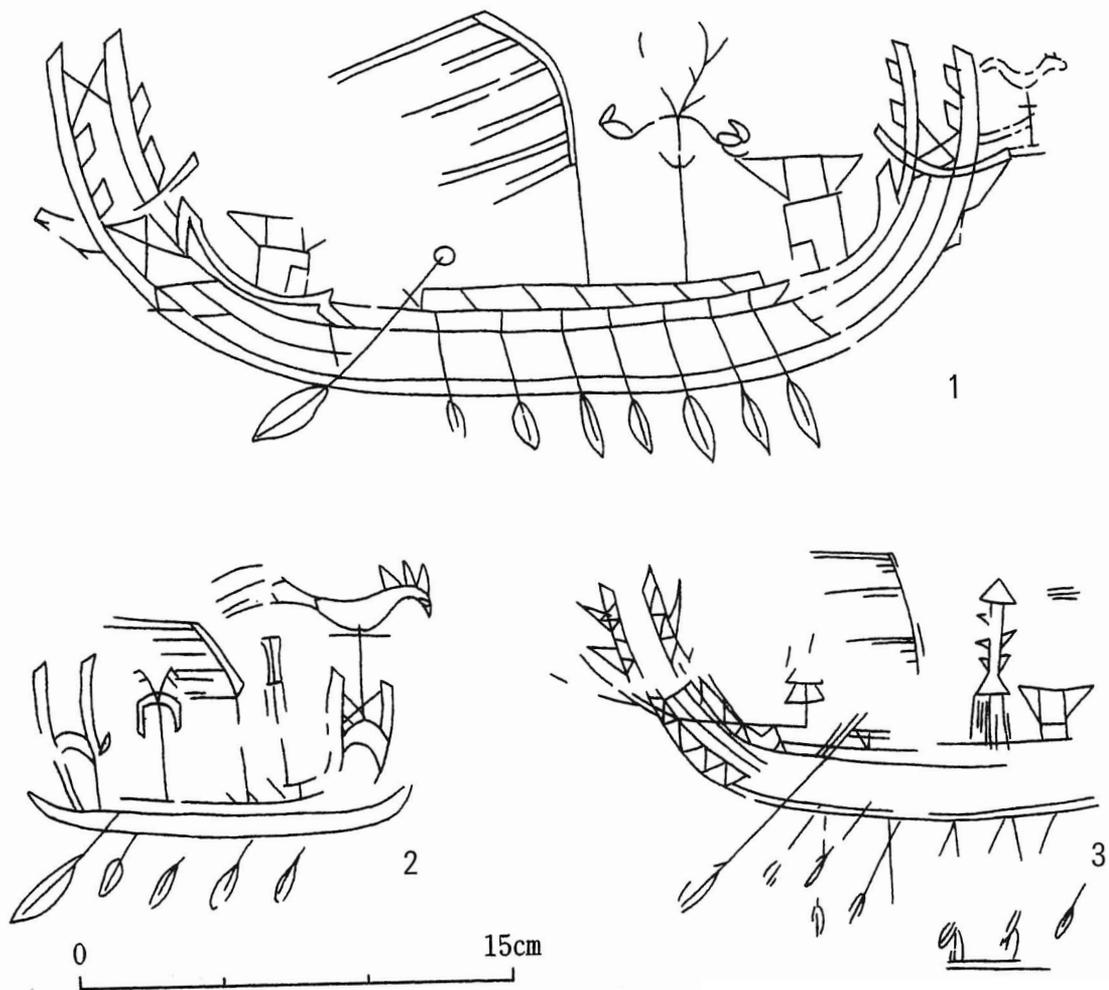
東殿塚古墳出土の埴輪に描いてある旗は、細長い幾条もの横きれが縦一列にあって水平にたなびいている。旗竿は、風を受けて大きくしなっているから、竹笹製だろう。旗竿に沿って縦長の細い帯状の縦きれがある。きれの素材には、当時は植物繊維と蚕糸など動物繊維とがあった。この縦きれから細線を何条も平行してひいて横きれを表現していて、旗尻は輪郭線を省いて解放する。竿に取り付ける縦きれとそれに縫い付ける横きれからなるのは、現代の旗も変わらない。縦きれはしっかりした生地のをきれを用いて強度を持たせ、縦きれに取り付く横きれは風にひるがえりやすい柔軟な生地を選ぶのである。つまりこの絵画資料は現実の旗を正しく描写していたのである。

さてこのタイプの旗は、これまでに東殿塚古墳の他、岐阜県大垣市荒尾南遺跡出土土器(岐阜県文化財保護センター1998)、千葉県市原市天神台遺跡出土土器(浅利幸一1993)に描いてある。これら3遺跡の絵画資料は、弥生時代終末期から古墳時代前期におさまる。このうちで東殿塚古墳と荒尾南遺跡は墓域からの出土である。

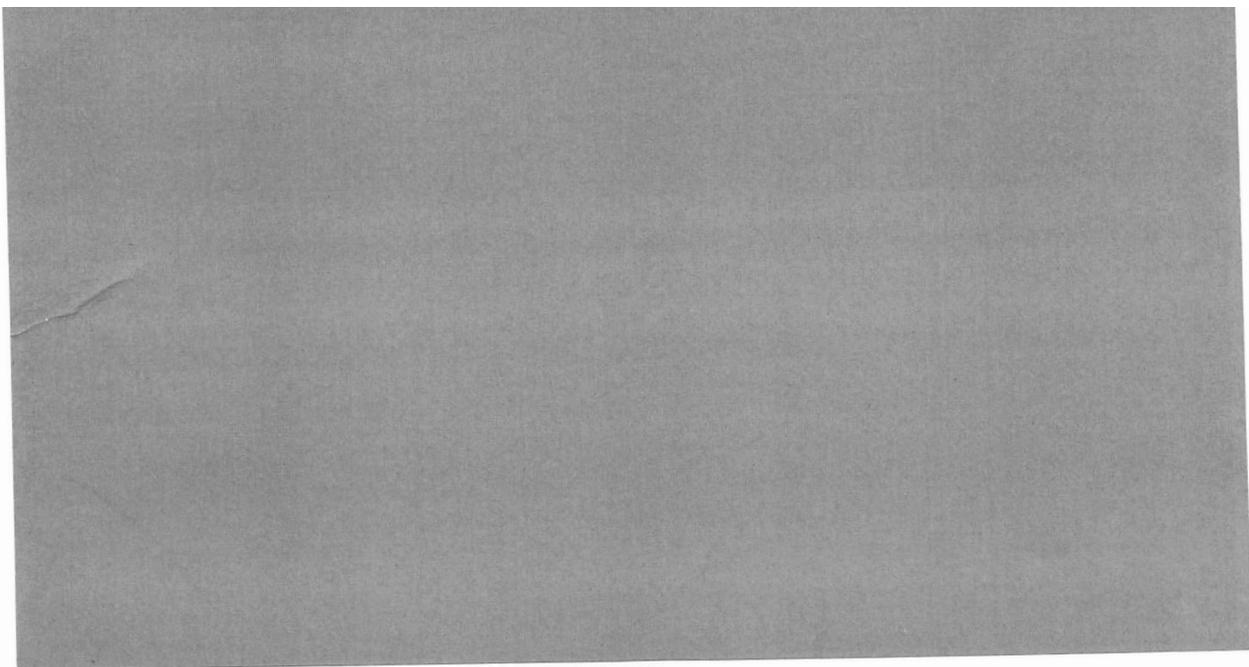
以上から、古墳の船形埴輪には豪華な大型船が選択されており、その中央に竹か笹を竿にして、幅狭の横きれが何条も風を受けてはためく旗が取り付けられていたと推定できるのである。佐原真さんはこの絵画資料と『常陸国風土記』の記事を結び付けた。そして『風土記』にみえる「はた」(旌・簾・幡)が、「虹の旌を張る」「赤簾青幡(あかはたあをはた)、交雑(まじ)り飄颺(ひるがへ)りけり。雲飛び虹張りて」とあるのは、細長いきれか紐を何本も並べた旗だからこそ生まれた文章表現ではないか、と私は想像しています。(佐原真1997、5頁)とした。だが「旌」と「張」の組み合わせがどうもすっきりしない。というのは「旌」が風にひるがえる様子を「張」と表現した例を知らないからだ。かといって「幕」を「旌」と呼ぶ用例も知らない。となればこの文字の組み合わせと絵画資料との対応関係を重視して、本稿では「虹の旌」をたなびく旗の様子とみる。こう理解して蓋(きぬがさ)と旗の組み合わせから、船形埴輪は、土製に材質転換した葬送船であったと推定する。

このタイプの旗は中国絵画にみつけることができる。

中国から伝来した 曹植(192年~232年)の作『洛神賦』を、あの顧愷子(344年~408?年)が絵画化した『洛神賦図巻』が後世の模本で今に伝わる。『洛神賦』は、黄初3(222)年作とも黄初4(223)年作ともいう(吉川幸次郎1997)。『洛神賦図巻』の模本は現在、故宮博物院(北京)、故宮博物院(台北)、遼寧省博物館、それにアメリカフリアギャラリーに所蔵されている(古田真一2000)。ここに東殿塚古墳のとそっくりな旗が描かれているのである(第1図4)。洛



天理市教育委員会『西殿塚古墳・東殿塚古墳』2000年



第1図 日本列島と中国大陸の旗
1~3 東殿塚古墳, 4 『洛神賦図巻』遼寧省博物館蔵

水の女神宓妃（ふくひ）が蓋（きぬがさ）の下にいて、宓妃の乗り物にひるがえる旗である。林巳奈夫さんによれば、これは中国で先秦時代からある、「旛（ぶつ）」という旗である（林巳奈夫1966）。この旗をなびかせて宓妃は、竜の引く雲車で上空を飛び、また馬車で地上を行くのである。

同類の旗は、韓釗さんによれば、唐代の壁画墓で出行などの場面などに描かれている。またわたくしの簡単なスケッチをみた陳馨さんによれば、同類の旗が広東省の現代の農村で出棺の時に使われているという。「担幡」あるいは「幡」といって、棒に数条の白いきれを縛る簡単な構造で、出棺時に男子が必ず持ち、墓地にこの旗を立てることもあるとのことである。

宓妃の乗り物は竜や馬が牽引するのに対して、日本列島のは船と違いはある。だが、①それに付属する旗が同種の特種な型式であること、それに②蓋（きぬがさ）と組み合わせた例のある事実を重視し、さらに加えて③中国には日本列島よりはるかに遡ってその存在が知られている事実を合わせ考えて、この型式の旗は、中国から日本列島に伝来したと推定する。伝来した時期は、日本列島での最古例からみて弥生時代終末期か、その直前であったはずである。

旗横きれの色は、遼寧省博物館例が赤いきれと青いきれ二色からなるのに対して、『洛神賦図巻』の他例はいずれも単色らしい。その旗が赤と青からなるなら、『洛神賦図巻』で横きれがひるがえる有り様は、『常陸国風土記』信太郡条の「赤旗青幡交雑飄颻」の描写そのままである。だが「すべての色彩を「青し」「赤し」「白し」「黒し」の四つに分節する日本人の基本的色彩感覚より見れば、七色の虹は結局「青し」と「赤し」の二色に過ぎない。」（佐竹昭広2008、56頁）とする佐竹昭広さんの視座からは、『常陸国風土記』の「虹」の旗は実に色とりどりだった可能性も残る（深澤芳樹ほか2009）。



第2図 熊本県虫追い祭りの旗（小林健浩氏撮影）

赤や白、青、黄、紫、緑など多色の細いきれが夏の青空にひるがえる光景は、貴重な伝統行事、熊本県天草市河浦町一町田八幡宮の神事「虫追い祭り」において、わたくしたちは毎年7月に目にすることができる（第2図）。もしこれが夜空の月光の下であれば、モノトーンに近づくだらう。

もしも円筒状の吹き流しをこの横きれが上下縦一列に並ぶ旗に換えれば、三重県熊野市で近年までおこなわれてきた二木島祭の神船こそ、海上を進む葬送船の姿そのものである（櫻井治男2006、穂積裕昌2009）。

葬送船の記憶 『北史』や『隋書』に日本列島における葬送船の記録があり、また『日本書紀』によれば、大化2（646）年3月22日には葬儀の簡素化を図ったいわゆる「大化薄葬令」が発行した（横山浩一2003）。養老年間（717～724年）に成立したと推定されている『養老令』「喪葬令」第26には、葬送船の規定はない（井上光貞ほか1988）。生没年は未詳だが7世紀前半に生まれ天智天皇の死にあった倭太后（倭姫王）も（上野誠2012）、大化元（645）年に生まれ大宝2（702）年に亡くなった持統天皇（鷗野讃良皇女）も、仮に葬送船をみたことがなかったとしても、『風土記』に書きとめているように当時あった口誦伝承や船形木製品などの伝統行事をとおして、葬送船を知っていた可能性が充分にある。

そうであるなら一番目の歌冒頭の「青旗」は、木幡という埋葬場所の地名を導くだけでなく、墓所上空にたなびく青旗を指す。また二番目の歌は、空にたなびく青雲に青旗をみたことになる。たなびく雲＝たなびく旗が、葬送船を象徴するのであろう。雲は、形や色や場所を様々に変える。星や月は、移動する。たとえば残雪の形に馬や蝶をみて、苗代の準備をする。甲斐駒ヶ岳や蝶ヶ岳である。また夏空に浮く雲に文殊菩薩や普賢菩薩の姿をみることもできる（渡辺京二2011、418頁）。これらは比喩のうちごく単純な直喩である。さらに新村出さんが「人麻呂には、構想上さらに面白い幼稚ながら壮大な比喩的な歌がある。」（新村出1995、250・251頁）と指摘した柿本人麻呂の歌、すなわち、

天の海に 雲の波立ち 月の舟 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ（巻第7、1068）

もまた、亡き人が天空世界に船で旅立ち、刻一刻と自分から遠ざかってゆくのを実感していたのではないか。そうであれば、人麻呂も共通する心象世界で呼吸していたことになる。

古来、船は新しい世界に向かう重要な手段であった（深澤芳樹2003）。そして葬送船は、水上から天空へのあわい、天際をきつと簡単に越えるのであろう。

このような背景を認めてもらえるなら、わたくしはある程度の確信をもってあらためて次に提案することができる。倭太后と持統天皇は冒頭に掲げた歌を詠んだ時、頭上に広がる気象や天体に、天空を逝く華やかな大船を幻視していたのではないか。それは記憶としての葬送船である。この大船上には美しい蓋（きぬがさ）の下に亡き主人がおり、船中央に立てた旗竿からは数百年来続いた幾条もの細い横きれが大きいたなびいていたはずである。そして何よりもこの大船をみたいと強く願い、希求させたのは、実に権力の中枢に残された者のみが知る心底の不安と孤独であったのではなかったのか。

本稿をなすにあたっては、韓釗、朱岩石、陳馨、浅利幸一、石村智、井上義光、上野誠、金関恕、桑田訓也、小林健浩、重住真貴子、田代主基男、長屋幸二、南部裕樹、長谷部善一、福田哲也、藤田英博、穂積裕昌、松本洋明、宮腰健司、宮本春志、吉岡幸雄、の諸氏に、ご教示、ご援助たまわった。第2図は天草を愛する写真の中から、小林健浩さんにご提供いただいた。以上の方々に、わたくしはあらためて深く感謝する。

引用文献

- 浅利幸一 1993 「土器に描かれた船—弥生～古墳出現期を中心として—」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』財団法人市原市文化財センター
- 井上光貞・関晃・土田直鎮・青木和夫 1988 『律令』（日本思想体系3）岩波書店
- 植垣節也 1997 『風土記』（新編日本古典文学全集5）小学館
- 上野利明 1997 「東大阪市河内町所在皿池古墳出土の舟形埴輪について」『宗教と考古学』金関恕先生の古希をお祝いする会
- 上野誠 2012 『万葉挽歌のこころ—夢と死の古代学』（角川選書499）角川学芸出版
- 大阪市文化財協会 1991 『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告Ⅳ 市営住宅建設に伴う発掘調査報告書前編』
- 岐阜県文化財保護センター 1998 『荒尾南遺跡—大垣環状線建設に伴う緊急発掘調査報告書—』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第26集）
- 広陵町教育委員会 2008 『菓山古墳の喪船』（広陵町文化財保存センター展示事業平成20年度特別陳列）
- 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守 1998 『日本書紀③』（新編日本古典文学全集4）小学館
- 小林行雄 1976 「舟葬説批判」『古墳文化論考』平凡社
- 櫻井治男 2006 「二木島祭」『平成17年度 ふるさと文化再興事業 三重県の民俗行事調査2』三重県教育委員会
- 佐竹昭広 2008 『古語雑談』（平凡社ライブラリー655）平凡社
- 佐原真 1997 「埴輪の船の絵と『風土記』」『新編日本古典文学全集5 月報40』
- 新村出 1995 「星夜賛美の女性歌人」『南蛮更紗』（東洋文庫596）平凡社
- 辰巳和弘 2011 『仙界へ翔る船—「黄泉の国」の考古学』新泉社
- 坪田真一 2009 「中田遺跡19次調査（NT93-19）」『（財）八尾市文化財調査研究報告126』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 天理市教育委員会 2000 『西殿塚古墳・東殿塚古墳』（天理市埋蔵文化財調査報告第7集）
- 東京国立博物館 2005 『東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書 重要文化財 西都原古墳群 埴輪子持家・船』
- 東野治之・小島憲之・木下正俊 1994 『萬葉集①』（新編日本古典文学全集6）小学館
- 中村弘 2000 「袴狭遺跡出土の線刻画」『月刊考古学ジャーナル』466巻
- 浜松市立郷土博物館 1978 『伊場遺跡発掘調査報告書第3冊 伊場遺跡遺物編1』
- 林巳奈夫 1966 「中国先秦時代の旗」『史林』第49巻第2号 史学研究会
- 深澤芳樹 2003 「弥生時代の船、川を進み、海を渡る」『平成15年春季特別展 弥生創世記—検証・縄文から弥生へ—』（大阪府立弥生文化博物館26）大阪府立弥生文化博物館
- 深澤芳樹・吉岡幸雄 2009 「茜と藍、絳青縑の考古学」『國文学』第54巻6号 学燈社
- 藤堂明保・竹田晃・影山輝國 2010 『倭国伝 中国正史に描かれた日本』（講談社学術文庫2010 Y1450）講談社
- 古田真一 2000 「伝顧愷子 洛神賦図巻（部分）」『世界美術大全集 東洋編 第3巻三国・南北朝』小学館
- 穂積裕昌 2009 「二木島祭と宝塚古墳船形埴輪」『第17回春日井シンポジウム資料集』春日井シンポジウム実行委員会
- 松阪市教育委員会・松阪市文化財センター 2005 『史跡宝塚古墳 保存整備事業に伴う宝塚1号墳・2号墳調査報告』（松阪市埋蔵文化財報告書1）
- 山口佳紀・神野志隆光 2001 『古事記』（新編日本古典文学全集1）小学館
- 山本健吉 2009 『万葉秀歌鑑賞（新装版）』飯塚書店
- 横山浩一 2003 「“大化薄葬令”に規定された墳丘の規模について」『古代技術史攷』岩波書店
- 吉川幸次郎 1997 『三国志実録』（ちくま学芸文庫824 [800]）筑摩書房
- 渡辺京二 2011 『逝きし世の面影』（平凡社ライブラリー552）平凡社

図版出典一覧（一部改変）

第1図1～3 天理市教育委員会 2000 『西殿塚古墳・東殿塚古墳』（天理市埋蔵文化財調査報告第7集）
図45

第1図4 曾布川寛・岡田健・柳町敬直 2000 『世界美術大全集 東洋編第3巻三国・南北朝』小学館
77.

